

保育者を目指す学生の『ピアノの弾き歌い』の 指導法に関する研究（3）

～オンライン授業における『ピアノの弾き歌い』の課題
及び配慮すべき点についての一考察～

足立 広美

1 はじめに

新型コロナウイルス感染症患者の増加により、本学の前期授業が対面授業からフルオンライン授業に切り替えられた。音楽や美術、体育等の実技科目についても同様であり、実技科目の授業形態が様変わりしている。未だ終息の兆しが見られず、後期に入っても、対面で行う授業は少数であり、本学教育学部の『ピアノの弾き歌い』に関する授業は、オンラインで行われている現状である。

コロナ禍以前において、日本の幼児教育・保育における音楽表現活動のうち、『ピアノの弾き歌い』に関する歌唱活動においては、幼稚園教育要領5領域に則って幼児の様々な発達を促すべく活動が行われていることは周知の通りである。しかし感染予防対策を取ることができないという理由で、2020年度保育士試験の二次試験において、「音楽に関する技術」分野である『ピアノの弾き歌い』試験の実施が取りやめられている。（全国保育士養成協議会，2020）『ピアノの弾き歌い』は、ピアノを弾くだけではなく、歌うという行為が伴うことから、コロナ禍においては、感染予防対策として中止せざるを得ない状況であることが窺い知れた。また、「文部科学省が、全国の小中学校に対し、授業や部活で合唱する際は原則としてマスクを着用するように注意喚起する通知を出している。」（時事通信2020年12月8日付）このような現状は、幼児教育・保育の現場における歌唱活動のあり方についての変化や対応が求められていると推察している。

現在までの国内における弾き歌いに関しては、弾き歌いの指導法に関する研究（諸井，2016；馬杉他，2018；多田，2019）や、歌唱教材の伴奏法、伴奏付けに関する研究（紙屋，後藤，2008；坂田他，2009，伊藤，2011；）、保育者養成校におけるピアノ教育における問題点に関する研究（新海，2011）、保育者に必要な音楽的能力に関する研究（宮脇，2001；；西海他，2017；山岸，2018）等、多数存在し、様々な角度からの研究が行われている。このような膨大な研究が行われてきていることを考えると、保育士試験や現場において歌唱活動に変化が求められていたとしても、コロナ禍

だから幼児教育・保育における『ピアノの弾き歌い』は必要なくなるということは、考えにくいのではないかと感じている。

上記のような理由から、保育者を目指す学生は、『ピアノの弾き歌い』の習得が必須であり、コロナ禍等、どんな状況下にあっても、今まで以上に、生きる力につながり、様々な発達を促すべく、子どもにより添う弾き歌いの習得を目指していくことが求められているのではないかと考えている。

2 問題の所在

『ピアノの弾き歌い』に関する研究として、筆者はこれまでに、保育者を目指す本学学生に対し、質問紙調査による、楽器の経験年数、歌唱教材の難解箇所等の課題・実態に関する研究や、授業に使用する教材研究について等、指導法のあり方を検討するための研究を行ってきた。本研究に関連するこれらの先行研究では、他の保育者養成校と同様、初心者及び3年未満の初心者に近い学生が全体の5割を超えていること、本学は保育者養成校ではないため、養成校と比較すると、弾き歌いに関する授業が少なく、1科目しかない。該当科目は、2020年度から「授業のためのピアノ」という科目名で、新カリキュラムとして開講された。新規科目であるため、授業の進行自体が模索中であること、1人の指導者が7-8人の受講生を担当している状況であることを鑑みると、これまでとは異なる革新的な『ピアノの弾き歌い』の指導法の確立が急務である。その他、筆者の受け持つ演習における弾き歌いの授業があるくらいである。しかしそれは、あくまでも対面授業を想定してするものであった。

前掲の先行研究は、すべて対面授業における研究であり、これまでの実技系の授業は、対面におけるレッスンが主流であった。初心者が多い本学の学生に対しては、奏法や運指等を丁寧に指導する必要がある、指導者の示す奏法等を、実際に見て模倣をし、学習することが最適な指導であると考えていた。しかしコロナ禍で、オンライン授業へ切り替えがなされた学習環境において、どのように『ピアノの弾き歌い』を指導すべきかが改めて問われることとなった。

3 研究目的及び方法

(1) 研究目的

本研究は、ZOOMを使用したオンライン授業における『ピアノの弾き歌い』に関する研究として、指導者が作成した授業記録から、今後のオンライン授業における『ピアノの弾き歌い』の指導法の確立のための課題について、客観的に状況を把握し、オンライン授業における課題や配慮すべき点について探求していくものである。

オンライン授業における『ピアノの弾き歌い』に関する先行研究では、弾き歌い学

習におけるネットレッスンの活用について（小倉，2014）やピアノ弾き歌い学習におけるeラーニング教材の効果（深見他，2010）についての研究が見られた。それぞれの研究では、動画作成における課題はあるものの、「微妙なテンポの揺れや歌とピアノの表現を読み取っている学生もあり、動画視聴の有用性が認められたり、」（小倉，2014）「歌唱面を中心に改善が見られ、履修者の実技力向上に有効であること」（深見他，2010）が論じられていた。しかしこれらはレッスン時間の不足を補うためのアイテムに過ぎないこと、録画されたものを視聴するスタイルであることから、授業時間に直接レッスンを行うものではなかった。

本研究のオンラインにおける『ピアノの弾き歌い』授業は、録画でもなく、レッスン時間の不足を補うためのレッスンではない。対面授業がただオンラインに切り替わっただけである。対面と同様のレッスンの有効性を実現するためには、指導者側、学習者側の両方の視点から、今後の指導法のための課題を見出すことが必要であると考えており、コロナ禍でオンライン授業が常態化になる可能性を考慮すると、オンラインにおける『ピアノの弾き歌い』について課題を見出すことは、今後のオンライン授業の未来を見据える上で、研究する意義があると考えている。

本研究は、オンライン授業における『ピアノの弾き歌い』指導についてまずは、指導者側の検討から、オンライン授業における『ピアノの弾き歌い』についての課題を見出し、その課題から指導者が配慮すべき点を考察するものである。

（2）研究方法

授業期間：2020年4月から2020年7月のうち計13回

分析期間：2020年12月

研究対象者：「授業のためのピアノ」及び「演習Ⅲ」の筆者が担当をした保育者希望の受講生15名

研究使用図書：山本学編者（2018年）「保育者になるためのピアノ教本」エイデル研究所

研究授業形態：オンラインによる個人レッスン

研究方法：指導者の作成による記録表の分析（資料1参照）

本研究は、ZOOMを使用したオンライン授業における『ピアノの弾き歌い』について、授業指導の課題を見出し、指導者の配慮すべき点について考察するものである。課題を模索するために、指導者が授業毎に作成した記録表を使用し、分析を行う。この記録表は、①学生の使用楽器、②レッスンした曲目及び合格した曲目等の進捗状況、③指導しづらかった点、④レッスン中に起こったアクシデント、⑤学習者の要望・気付いた点等について明記したものである。本研究では、主に、①、③、④についての記録から考察を行う。当初の記録表の使用目的は、対面授業同様で、主に学習者の進捗について記録を残すためのものとして想定されていた。しかし、オンライ

ン授業最初のレッスンで、対面とは異なるアクシデントが起こったことをきっかけに、進度の他、技術面における気づき、レッスン最中に起こったアクシデントについても明記するようになった。

記録表を分析することは、弾き歌いの技術面、音楽環境、教育的配慮等が見出せる可能性があると考えている。

以上の研究方法から、指導者から見たオンライン授業における『ピアノの弾き歌い』の課題を見出し、その課題から見る指導者側の配慮すべき点について考察していく。

4 ZOOMにおけるオンライン授業『ピアノの弾き歌い』指導の課題曲及び授業の進め方について

○課題曲等について

弾き歌いの課題曲(資料2参照)は、対面時を想定して作成した課題曲と同様で、「生活の歌」、「季節の歌」、「集いの歌」、「マーチ」等40曲である。このうちの幼児教育現場に欠かせない「生活の歌」＜「あはよう」「おべんとう」「おかえりのうた」等＞を必須曲として、弾き歌いの指導を開始した。

教材は初心者及び中級者であれば対応できるような教材(研究方法参照)を使用し、学習者全員が必須曲＜生活の歌＞から順番に行うものとした。

必須曲合格後は、受講者それぞれの進度に合わせて課題曲の指導を行ったが、対面授業からオンライン授業に切り替わっていることへの学習者側の不安等を考慮することや、オンラインにおける指導方法について確立がなされていなかったため、当初対面を想定して考えていた、単位取得のための最低到達課題曲数については提示せず、学習者の環境面や弾き歌いの様子を確認しながら授業を行った。

○授業形態等について

授業形態については、まず始めは全員がZOOMのメインに集合してもらい、その日の授業スケジュール等について確認後、ブレイクアウトセッションを使用し、マンツーマンにおける『ピアノの弾き歌い』指導を行った。指導者側は、パソコンに付随するカメラの他に、Webカメラをセッティングし、ピアノの鍵盤を受講者が参照できるように配慮した。受講者側のカメラについても、鍵盤が見える位置にカメラをセッティングするように指示をした。また指導者一人につき、7-8人を指導し、授業の3回から4回レッスン毎に発表会を開催して、お互いの進捗状況や、表現方法等を学びあう機会を設けた。

本演習は『ピアノの弾く歌い』がメインであるため、ピアノのみならず、歌唱について、歌詞の意味や発声、音程の難しいところを伝える授業回も設けた。

その他、必須曲の生活の歌や幼児教育現場でよく使用される数曲については、指導者の作成したピアノ伴奏をあらかじめ録音し、学習者が事前に確認できるように配慮した。

5 記録表の分析結果について

①学生の使用楽器及び鍵盤数について

全体の約 1 割がピアノを、約 9 割が電子ピアノを使用していた。使用する電子ピアノの鍵盤数は、54鍵盤<4人>、61鍵盤<9人>、88鍵盤<2人>であった。

③レッスン中に起こったアクシデントについて (表1 参照)

レッスン中に起こったアクシデントについては、表1の通りである。

- ・指導者側や学習者側の通信状況が悪く、レッスン途中に通信が切れてしまい、途中で指導がストップしてしまった。
- ・通信状況により、弾き歌いの姿は確認できても、音が全く聞こえなくなる事があった。
- ・ピアノと同時に歌を歌うと、両方の音のバランスが図れず、『ピアノの弾き歌い』のレッスンは、ピアノか歌どちらかずつしか指導できなかった。
- ・指導者、学習者両者の音を同時に鳴らすと、どちらかの音しか聞こえてこなくなり、両者が一緒に弾き歌いできず、士気を高められるようなスムーズな弾き歌いの指導ができなかった。
- ・16分音符等の細かいリズムを連打したり、分散和音を弾くと、映像が固まり、正しいリズム把握ができない事があった。
- ・学習者側が使用する鍵盤数が足りなく、楽譜通りに譜読みをすることが困難だった。<例：「あまだればったん」>
- ・高音や低音になると、突然音が消えてしまった。
- ・学習者側は一定のテンポで弾いているのに、通信状況により、指導者側には、テンポが遅く聞こえたり、速く聞こえたりして、その度に学習者へ向けて、弾き歌いテンポについて確認しなければならなかった。
- ・両者の音がそれぞれに遅れて聴こえてくるため、指導の声掛けのタイミングが難しかった。

これらのアクシデントでは、通信環境や楽器環境によるものが多く見られた。対面授業では生じない問題点であり、オンラインならではのアクシデント等であると考えられる。

④指導しづらかった点について (表1 参照)

指導しづらかった点については表1の通りである。

- ・電子ピアノを使用している学生が9割であり、指が転びやすく、16分音符等の細かいリズムの指の動きについて指導が行き届かなかった点。
- ・使用するピアノの環境から、強弱等の音楽の表情が伝わりにくく、弾き歌いの表情を豊かにする声掛け、方法が見つけれなかった点。
- ・ピアノと歌のバランスが悪く聞こえ、それを指示したとしても、指導者側もオンラインであることから、バランスのよい弾き歌いがどのようなものなのかを的確に示すことができなかった点。
- ・学習者側のカメラの設置場所によって、正しい運指や運指のチェンジ等＜例「おはよう」他＞の確認がしづらかった点。
- ・正しい運指や運指のチェンジについての指導が伝わりづらかった点。
- ・複雑なリズム奏法について、直接指導者が弾き方を示しても、画面を挟むと伝わる割合が低下し、スムーズな連打等の指導がままならなかった点。

指導しづらかった点については、③のアクセシビリティと重なる点が多く見られた。運指や音の表情、指のテクニック等においては、対面時における課題と重なるが、通信状況等を鑑みる必要があり、対面時よりも考慮すべき課題が多いと考えられた。

技術面や指導しづらかった点の他に、学生への授業スケジュール＜例えば発表会の日程＞が徹底されておらず、混乱をきたす授業回もあり、指導方法云々よりも、基本的な授業スケジュール等について周知、確認しておく必要があると感じた。発表会や授業の変更については本学のポータルサイトの講義連絡やシラバスに明記してい

表1 ③レッスン中に起こったアクセシビリティ及び④指導しづらかった点

運指やリズム等に関する項目	<ul style="list-style-type: none"> ・指が転びやすい＜電子ピアノ使用＞③④ ・学習者の配置するカメラの位置によって、運指の確認がしづらい③④ ・指をチェンジする箇所の確認、及び指導が難しい④ ・16分音符や付点等の複雑なリズム奏法の指導が伝わりづらい④ ・全員ではないが、ピアノと歌唱を同時に行うと、どちらかがかすかに聞こえる程度であり、弾き歌い奏法のバランス面で指導が難しい③④
授業＜音楽＞環境に関する項目	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いの音が遅れて聞こえる③④ ・指導者と受講者が同時に演奏すると、どちらか一方の音しか聞こえない③④ ・通信状況が悪く、受講者は一定のテンポで弾き歌いしているのに、指導者側にはテンポが速くなったり、遅くなったり聞こえてしまう③④ ・16分音符等の連打する奏法を弾くと、画面が固まる③④ ・歌唱曲を弾く際の鍵盤数が足りない＜例えば「雨だれぼったん」＞③④ ・高音や低音になると全く音が聞こえなくなる、音が消える③④ ・強弱や音楽奏法等の表現が伝わりにくい③④
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者も含め通信状況が悪く、突然画面から消え、レッスンが中断する、ロスタイムが出る③ ・授業スケジュールが周知されておらず、発表会の日程等、混乱が生じた。

たが、対面で伝えられることがZOOMをかえすと全員に伝わらずそのまま授業が終了してしまうことがあった。

レッスン中のアクシデントや指導しづらかった点において、主に通信機器の状況を考慮した配慮が必要であることが考えられた。対面時とは異なり、通信をかえた『ピアノの弾き歌い』の指導は、技術面のみならず、学習者に周知するべき点についても確認する必要があることが分かった。

6 指導者の配慮すべき点について

オンライン授業における『ピアノの弾き歌い』について、指導者の作成した記録表による課題から、以下のように配慮すべき点が挙げられた。

① 指導者の通信環境、WEBカメラのセッティング

対面授業よりも、指導者が演奏をして、それを参考に練習することが多いため、指導者側の音が途切れたり、通信が不通になることは回避すべきである。また、学習者に指導者側の鍵盤がよく見える位置にカメラをセッティングすること等の周到的な準備が必要であると考えます。本講義では、SNSに指導者の演奏した課題曲のうち数曲をアップし、学習者が容易に見て練習できるように工夫を施した。その際、運指が見える位置にカメラを設置することや、抑揚をもって表現することを心掛けて対応した。

② 学習者が使用する鍵盤楽器の状況を知る

例えば、ピアノか電子ピアノについて、鍵盤数について、強弱など表現することができる楽器か否か等である。一人一人の状況を知ることで、それぞれに応じたきめ細やかな指導ができると考える。表現ができない楽器を使用する学生には、こちらで演奏をし、楽譜と照らし合わせながら、音楽を伝えることは可能であると考えられる。

③ 弾き歌い課題曲のより綿密な計画を立て、学習者に事前に伝えておく

対面と異なり、通信状況の関係で、授業途中で抜けていく学習者がいるため、レッスン毎に行う曲目数、曲目目安、発表日等を事前に知らしておくことが必要である。対面授業よりも綿密な計画性をもって授業を遂行することが、学習者の充実した学びに結びつくものと考えている。

④ 学習者の演奏を待つ体制、丁寧な言葉かけの必要性

ZOOMの特徴上、音が遅れて聞こえたりすること等から、対面授業と比べると、円滑な授業は見込めない。技術面において細かく指導したい気持ちもあるが、それ以上に、学習者の演奏を根気強く聞き、指導者側も根気強く学習者に丁寧に指導し、最

大限に励ましを送り続けることが、学習者の様々な安定につながり、練習や授業に対する意欲につながると考えている。そして指導者側が創造力を巡らせ、柔軟な体制で指導を行う心構えが必要と感じている。

7 まとめ及び考察

本研究では、記録表を分析し、オンライン授業における『ピアノの弾き歌い』指導について指導者側の検討から課題を見出し、それに対する指導者の配慮すべき点を考察することを目的としていた。

記録表を分析してみると、レッスン中のアクシデント及び指導しづらい点においては、技術面に見られた運指や音の表情等の課題とともに、通信状況やZOOMの特徴により左右されてしまう課題が多く挙げられ、通信機器による電波障害やZOOMの特徴から生じる課題が多くあることが分かった。

指導者が配慮すべき点については、技術面のみならず、両者の通信状況や音楽環境、綿密な授業計画に関する周知、カメラのセッティング等の授業環境等、様々な点での配慮が必要であることが示唆された。

ZOOMは、会議用に使用する分には、性能を発揮することが考えられるが、音を強制的に調整してしまう特徴から、音を介す授業には適さないことが考えられた。かといって、大学全体で動いているシステムから逸脱して授業を施すことは到底難しいことと捉えている。

オンラインにおける『ピアノの弾き歌い』の授業については、ZOOM上のみの授業に頼るのではなく、リアルタイムでの授業とあらかじめ曲について解説した録画との併用を試みたり、音楽のレッスンに適したオンラインサービスを使用した指導を施す工夫が必要であることが考えられた。

このようにオンラインにおける『ピアノの弾き歌い』においては、ZOOMにおける授業は適さないという結果が示唆された。しかしこの現状について憂いていても仕方がない。このような先の見えない様々な課題を見出す中で、筆者が一番大切と感じたことは、学習者の様々な環境について把握することはもちろんのことであるが、指導者側の一方的な指導が回避できるような、学習者が学びやすい環境を作り上げられるように心を配ることであると考えている。それは、指導者側の励ましや信頼関係を深めること、学習者との思いを共感し合える関係性を築くことである。授業スケジュールについて周知する際や、授業の進め方について伝達する際に、通常であればポータルサイトで確認できていたことも、対面からオンラインに切り替わっただけで、お互いが様々な事に気が取られ、大切なことが伝わらないことが何度もあった。それは技術面の指導においても同様で、通信状況によって聴こえ方が異なったり、指導途中にいきなり画面から消え、不安が生じ、確認作業が増え、時には苛立ちを感じ

たこともあった。これは指導者のみならず学習者においても同様の気持ちで授業に臨んでいるようにも感じられた。この不安や不満を払拭するような働きかけが、心の安定につながり、やがては何度も通信が不通に陥って授業が中断したとしても、学習意欲を失わないことや、共に精進しようとする心意気につながると考えている。

以上、オンライン授業における『ピアノの弾き歌い』課題及び配慮すべき点については、ZOOMによる指導は適さないことが示唆されたが、この難題や課題を軽減するためには、学習者への励まし等、教育的な配慮が必要であると考えられた。

今回は指導者側からの見解に留まったが、学習者側は積極的に練習をし、授業に臨んでいる姿が多くみられた。実技系の授業では、対面授業が全てにおいて上手くいくと考えられ、デメリットばかりが露呈したが、今後は、学習者の練習状況、授業意欲等の状況、両者の相互作用から、オンライン授業ならではのメリットに結び付けられるような展望を模索していきたい。

資料 1 「ピアノの弾き歌い」授業記録表

日時 年 月 日

①学生の使用楽器

②レッスン曲目及び合格曲

③指導しづらかった点

④レッスン中に起こったアクシデント

⑤学生の要望・気付いた点

⑥その他

資料2 弾き歌い課題曲40曲＜使用図書から＞

NO	必須曲＜弾き歌い＞	頁数	NO	必須曲＜弾き歌い＞	頁数
※	生活の歌	-	21	まつぼっくり	105
1	おはようのうた	62	22	小犬のマーチ＜調性＞	30
2	おはよう	62-63	★	習得したい曲（歌唱）	-
3	おべんとうのうた	63	23	大きな栗の木の下で	42
4	お帰りの歌	64	24	せんせいとおともだち	55
5	さよならのうた	64-65	25	とんぼのめがね	83
※	集会の歌	-	26	パンダうさぎコアラ	86
6	Happy birthday to you	66	27	ぼくのミックスジュース	87
7	おもちゃのチャチャチャ	66-67	28	世界中の子どもたちが	89
8	思い出のアルバム	70	29	ドレミの歌	96
9	バスごっこ	72	30	アイスクリームのうた	102
10	森のくまさん	90	31	にじのむこうに	106
11	ぞうさん	99	32	おかあさん	109
12	あめふりくまのこ	113	33	勇気100%	110
13	アイアイ	117	34	にんげんていいな	118
14	いぬのおまわりさん	123	35	おはながわらった	122
※	季節の歌	-	36	コンコンクシャンのうた	124
15	あまだれぼったん	40	37	ことりのうた	125
16	たなばたさま	54	38	にじ	127
17	こいのぼり	54	39	赤鼻のトナカイ	92
18	※ジングルベル＜調性＞	20-23	40	世界中のこどもたちが	89
19	お正月	59			
20	とけいのうた	82			

引用・参考文献

- 足立広美・大澤のり子（2018）「保育者を目指す学生の『ピアノの弾き歌い』の指導法に関する研究（1）－本学学生への質問紙調査における実態とついて－」『創価大学教育学論集』第70号
- 足立広美・大澤のり子（2019）「保育者を目指す学生の『ピアノの弾き歌い』の指導法に関する研究（2）－「授業のためのピアノ」のための使用教材選択に関する一考察－」『創価大学教育学論集第72号』
- 小倉隆一郎（2014）「子どもの歌の弾き歌い学習におけるネットレッスンの活用」『教育学部紀要 文教大学教育学部 第48集』
- 馬杉知佐他共著（2018）『幼児教育における弾き歌いの考察－音楽的・技術的なアプローチを含む－』和願愛語46巻 幼児教育出版社
- 桶谷弘美他（2005）『音楽表現の理論と実際』69頁音楽の友社
- 紙屋信義・後藤みゆき（2008）「ピアノによる子どもの歌伴奏の効果～アレンジによる伴奏法を考える～」『東京未来大学研究紀要』第1号
- 坂田直子・山根直人・伊藤誠（2009）「保育者養成における音楽的専門性の育成－幼稚園教師へのピアノ等鍵盤楽器に関する質問紙調査を手がかりに－」『埼玉大学

紀要教育学部, 58号』

時事通信 (2020) 合唱時はマスク着用を 文科省、全国の学校に注意喚起 新型コロナ
ナ <https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20201208-00000107-jij-soci>

新海節 (平成24年) 「保育者養成校におけるピアノ教育」『藤女子大学紀要』第49号

多田純一 (2019) 「幼稚園教諭に求められるピアノ弾き歌い技術とその指導法に関する一考察－幼稚園実習第2段階における課題を分析して－」『奈良佐保短期大学研究紀要』第27号

西海聡子・笹井邦彦・細田淳子 (2017) 「保育者養成における弾き歌いコード伴奏法」『東京家政大学大学研究紀要第57集pp.59～68』

保育士試験を受ける方へ | 一般社団法人全国保育士養成協議会 (hoyokyo.or.jp)
(2020)

深見友紀子・中平勝子・赤羽美希・稗方攝子「ピアノ弾き歌い学習におけるeラーニング教材の効果」(2010)『京都女子大学発達教育学部紀要 (6), 35-46』

宮脇長谷子 (2001) 「保育者養成におけるピアノ指導と課題－養成校へのアンケート調査を通して－」『静岡県立短期大学大学部紀要』15号

諸井サチヨ (2016) 「保育者養成校での『弾き歌い』指導に関する一考察－～学生のピアノ技能に関する実態調査を中心に～」『淑徳短期大学部研究紀要』第55号

山岸徹 (2018) 「音楽表現力を引き出す伴奏付け指導メソッドの構築～授業実践を振り返って～」『大阪キリスト教短期大学紀要第58集78-87頁』

山本学編著 (2019) 『保育者になるためのピアノ教本』エイデル研究所

***Piano Hiki Utai* Instructional Methods for Students Aiming to Become Childcare Workers[3]:**

A Consideration of Online *Piano Hiki Utai* Instruction : Problems and Issues

Hiromi ADACHI

This study aims to delineate issues related to “*piano hiki utai*” (“piano playing and singing”) as taken from class transcriptions of a teacher, and to provide a consideration on points requiring particular care.

This paper describes issues related to incidents occurring within lessons, and points to where teaching difficulties arise. Many problems occur especially due to communication malfunctions and due to the characteristics of the ZOOM videotelephony software program. Such problems include lesson interruptions or suspensions, issues where there is a delay in sound transmission between the teacher and the learners, etc. These issues suggest that ZOOM is not suitable for “*piano hiki utai*” teaching.

The following points were found to require particular care in tandem with the issues described above. Not only do technical issues occur regarding “*piano hiki utai*” one must also strive to create an environment where students can feel comfortable and secure when taking classes. This requires that the teacher gives continuous encouragement to students, strives to deepen the relationship of trust with them, and constructs a relationship of sympathy and shared concerns. Only when there is a good relationship on both sides will students be able to sustain their motivation for learning when any kind of incident or accident occurs, as a strong mutual relationship can be linked with continued motivation to study.